

1918年「板東俘虜収容所」における 「第九」演奏について

「板東俘虜収容所」ではドイツ兵捕虜による様々な文化活動の中で、音楽活動も活発に行われ、1918年6月1日、ベートーヴェンの交響曲第9番合唱付が全楽章演奏されました。収容所で「第九」の演奏がなされたという記述は、紀州徳川家十六代目当主の徳川頼貞氏が1943（昭和18）年に出版した音楽的自叙伝『薔庭楽話』に記事が見られます。頼貞氏は、素人であるドイツ兵捕虜が「第九」を演奏することに驚きを示し、彼らの音楽に対する真摯な態度と教養に心を打たれたと記しています。

音楽的に素人であったドイツ兵捕虜たちがなぜこの難曲に取り組み演奏をしたのか、それを考えるために、ベートーヴェンと「第九」について話を進めたいと思います。

ベートーヴェンは進歩的で自由主義であり、それまでの音楽家と違い、王室や貴族など権力とは距離をおいた大衆に向けての作曲家でした。それまでの音楽家が一部の階級の依頼で作曲をしていたのとは異なり、様々な作品を生み出しました。幼少期の恵まれない家庭環境や貧困、失恋、音楽家にとって致命的な耳の病、自殺まで考えた苦悩の中で、芸術が彼を救います。自身の内面から湧き上がる創作の欲求に従い音楽を書きました。

芸術により人を救いたいという強い想い、禍のなかに希望を見いだす精神力、幸福をもたらすとの信念、「苦悩に負けずに、突き抜けることができれば、そこには歓喜が待っている」という人間賛歌が、後世を明るく照らす曲を生み出しました。

板東のドイツ人捕虜たちはベートーヴェンや「第九」をどのように捉えていたのでしょうか。板東の「第九」に関する残存資料を調査しました。『ディ・バラッケ』の記事、演奏参加者に配布された資料などからは、新たなことに挑戦したいという未知への好奇心、またドイツ文化である音楽を広めたいという思い、演奏を耳にする人々に幸福を贈りたいという願い、そして「第九」が生み出された背景への共感、自由と平和への希求の想いがこめられていました。このように、ベートーヴェンが望んだとおりに捕虜たちは精神的な自由を

勝ち得、救われたのではないのでしょうか。

板東においては、日本の収容所側の配慮があり、捕虜の人権が守られ、経済的にも安定し、衣食住も満たされていたことで、芸術活動が豊かに行われました。そこでの芸術活動は、ドイツ兵捕虜の心の支えであったと考えています。芸術文化は、人々にとって励ましとなり、生きる希望を与えるもの、精神的な支えとなるものであり、板東の資料、板東の「第九」はその証明ともなります。国籍や時代に関係なく、人生において芸術文化に楽しみ打ち込むことが、精神力を強くし、さらには人としての知性と感性を磨くのかもしれません。

（長谷川）

初演から100周年 子孫を迎え「よみがえる第九」

「第九」アジア初演を再現した「よみがえる『第九』演奏会」が、初演から100周年の6月1日、同時刻の午後6時30分からドイツ館前広場で開催されました。

会場では特設テントが設けられ、指揮者の延原武春さん率いるテレマン室内オーケストラ約40人の演奏がスタート。陽が落ちて夕闇が深まったころ、招待されたドイツ兵捕虜の子孫や演奏を聴きに訪れた聴衆約1200人が見守る中、初演と同様に男性だけで編成されたソリスト4人と、鳴門「第九」を歌う会や関西学院グリークラブなどの男声合唱団約80人



6月1日 よみがえる「第九」演奏会 ドイツ館前広場

が加わり合唱が展開されていきました。

フィナーレではドイツ館背後の山林をバックに通常の混声合唱とは異なる力強いハーモニーで歓喜の歌声を響かせると、客席はもとより大勢の立見や隣接するベートーヴェン像前にも膨れ上がった聴衆から大きな歓声と拍手が沸きあがっていました。

100 年前に戦争の憎しみを乗り越えドイツ兵捕虜たちによりまかれた「第九」の種が、再び「板東の地」で彼らの子孫の前で大きく開花した演奏会となりました。

ドイツ館前広場に松江所長の銅像

ドイツ館前広場に「第九」アジア初演 100 周年記念事業の一環として建立していた板東俘虜収容所の松江豊壽所長の胸像と顕彰碑が完成し、「よみがえる第九演奏会」にあわせ 6 月 1 日に除幕式が行われました。

松江所長は第一次世界大戦中の板東俘虜収容所のドイツ兵捕虜たちを人道的に処遇したことにより、彼らが「第九」アジア初演をはじめ百回を超えるコンサートの開催や所内新聞等の印刷物の発行、地元住民との交流なども行うことが可能になり、現在の日独交流の基礎が築かれました。

胸像および顕彰碑の建立は、こうした松江所長の業績を顕彰し後世に伝えようと、平成 28 年 7 月に鳴門市内外のさまざまな分野の方々が銅像建立実行委員会を結成し、「第九」100 周年に向け募金活動を開始。ドイツの姉妹都市のリューネブルク市や、松江所長の出身地で鳴門市の国内親善交流都市・会津若松市の関係団体を含む 640 の団体、企業、個人から 971 万円ほどの募金が集まり実現しました。

胸像は徳島大学名誉教授の河崎良行氏の制作で高さ 2.1 メートル、幅 62 センチ、奥行き 52 センチの銅製で、ドイツ館に向かって顕彰碑とともに建てられました。よみがえる「第九」演奏会の前に大勢の人たちが見守るなか、同実行委員会の林宏明会長や泉理彦鳴門市長、松江所長の孫の松江行彦氏らが除幕すると、口ひげを蓄えた松江所長が現れ、大きな拍手が起きていました。



6 月 1 日 松江所長の銅像除幕式 ドイツ館前広場

ドイツ兵捕虜の子孫が来館 資料・ドイツ館見学

6 月 2 日に今回の 100 周年事業で来鳴日したドイツ兵捕虜の子孫の方々に、父あるいは祖父たちの記録が刻まれた寄贈資料と対面してもらいました。当日は 7 組 13 名の子孫およびその家族が来館し、最初にブシュミン国際交流員の案内でドイツ館を見学。収容所での捕虜たちの幅広い活動が成し得たのは、松江豊壽収容所長と高木繁副官の配慮があったことや、1960 年代から始まった本市と元捕虜の交流の復活が高橋春枝氏らの「ドイツ兵の慰霊碑」の清掃活動から始まったことなどの説明を受けました。その後、会議室に移動し、祖父たちが「板東の思い出」として持ち帰り、ドイツ館建設を契機として寄贈された写真やイベントプログラム・スケッチ・回想録などの資料を森ドイツ館長と長谷川学芸員の案内で見学しました。

今回来鳴した子孫の祖父たちが収容所のどの兵舎で暮らしていたかを、1917（大正 6）年に発行された『板東俘虜収容所案内記』の図面で確認したり、集合写真に写った祖父たちの姿を見つけ家族同士の交流を深めていきました。



6 月 2 日 ドイツ兵捕虜の子孫のドイツ館所蔵資料見学

資料紹介

板東ドイツ兵捕虜の音楽活動

今年 5 月から 6 月にかけて、鳴門市では「ベートーヴェン第九交響曲アジア初演 100 周年」を記念してさまざまなイベントが開催されました。ドイツ兵捕虜の音楽活動というと「第九」が何かと世間の耳目を引きますが、彼らの演奏した曲目はもちろんこれだけに止まるものではありません。

彼らが音楽会等で演奏した曲目は非常に多彩かつ数が多く（長短合わせおよそ 500 曲）、とてもここで紹介し尽せるものではありません。そこで音楽団体に注目すると、時期により

違いはあるのですが、だいたい管弦楽団と吹奏楽団、合唱団がそれぞれ2つありました。ほかにマンドリン楽団が存在していた時期もあります。このうち管弦楽団については団員数が2つとも45名とするのが一般的なのですが、実際にはメンバーの出入りがあり、エンゲル・オーケストラの場合延数では70名を超えています。いずれにしろ板東の約千名の捕虜のうち、約1割が管弦楽団に参加していたことになります。ほかの音楽団体も含めると、約2割が音楽活動に携っていたのではないのでしょうか。

これらのうち一番多く演奏会を催していたのは2つの管弦楽団、徳島オーケストラ（後に MAK オーケストラと改称）とエンゲル・オーケストラであり、ドイツ館にはこの2楽団の演奏会プログラムが沢山収蔵されていて、折にふれ話題に取上げられることが多いです。しかし今回はこれらの楽団についてではなく、従来ほとんど話題になることのなかった室内楽の演奏会を見てみようと思います。

室内楽については、「室内楽のタベ」と題する音楽会が全部で7回開催されています。そこでは古典派からロマン派にかけての作曲家（特にドイツ系）による楽曲が多く演奏されています。有名なものを挙げるとすれば、ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ「クロイツェル」、シューベルトのピアノ五重奏曲「鱒」があります。それ以外にもベートーヴェンのピアノソナタ第8番「悲愴」とかブラームスのヴァイオリンソナタ第1番「雨の歌」、メンデルスゾーンのピアノ三重奏曲第1番なども比較的良く知られている曲目ではないでしょうか。独奏ないし少人数による結構本格的な音楽会となっていて、かなりの技量をもった人たちが演奏を披露していたことが分ります。ドイツ館にはこれらの演奏会のプログラムすべてがありますが、残念ながらプログラム自体には演奏者の名前が記載されていません。そのため他の史料から判明する場合をのぞいて、どのような人が演奏したのか不明です。「鱒」についてはヴァイオリンがガルスター海軍中尉、チェロがデムラー海軍大尉ですが、二人とも板東に来る以前にも音楽会で演奏していて、職業軍人ながら音楽素養のある人でした。ピアノはクラーゼンですが、この人は丸亀時代からエンゲル・オーケストラのメンバーであり、板東でも盛んに演奏活動をしており、エンゲルが独奏する際によく伴奏をしていました。

ちなみにピアノはグランドピアノではなくアップライトだったようですが、演奏会毎に運びこんだのか、ホールないしその近くにずっと置かれていたのかどうか不明です。面白いことに、収容所内の「タバタウ」という小屋街の一角にレンタルピアノをしている場所があるので、それを使っていたかもしれません。（川上）



グスタフ・メラー氏の子孫 ペトラ・ボルナーさんによる資料の寄贈

「板東俘虜収容所」の捕虜であったグスタフ・メラー氏は、収容所新聞『ディ・バラック』の編集員を務め、冊子の挿絵やプログラム類、絵葉書などの多くのデザインを担当しました。2016年の学芸員着任時より、板東のデザイン約8割を担ったメラー氏に興味を抱いて調査を試み、2017年10月、スイス在住の子孫ペトラ・ボルナーさんと連絡が取れ、2018年1月にスイスを訪れました。

メラー氏は板東での解放後、板東の活動プログラムを冊子とし、『ディ・バラック』をバインダーに纏めドイツに持ち帰り、大事に保管していました。ボルナーさんは、「戦時下の捕虜という困難な時にも関わらず、板東では、創造力を発揮することを許しました。作品を制作し表現することで、いつ終わるかかわからない収容所生活のなかで、祖父は救われてたのでは。祖父の遺産は、彼の心に平和を与えた『人道』の資料でもあります」と語っていただきました。

そしてメラー氏とその家族により大事にしていた資料を、2018年6月と10月に分け、ボルナーさんより寄贈いただきました。6月の式典に合わせ寄贈いただいたのは、プログラム冊子と『ディ・バラック』（1919年4月5月6月7月号の4冊をバインダーで纏めたもの）でした。

このプログラム冊子から、様々な発見がありました。これまで「第九」初演のプログラムが誰によってデザインされたのか確証がありませんでした。しかし、この冊子の「第九」のプログラムには、メラー氏を書いたと思われる彼のサイン「GM」が入っていました。更に、この冊子は100枚のプログラムが概ね時間系列で綴じられていましたが、これまでドイツ館所蔵にはなかった新たなプログラムが、31点含まれていました。

音楽プログラムでは、謄写版によるデザインが洗練されていく過程や、多くの祝祭プログラムからは、敵国の収容所において、自国の皇帝や王の誕生を自由に祝う様子が窺え、収容所に自由と寛容の精神があったことが見受けられました。またスポーツプログラムでは、サッカー、シュラークバルなどの競技が、多くのチームにより総当たり戦で活発に開催されていたことがわかり、初めて発見された食事会のプログラムには、極上各種肉のパテ、キャビアなど豪華な食事の内容が記されていました。これらの資料からは、豊かで活気ある板東の生活を新たに窺い知ることができました。

10月には、ユネスコ「世界の記憶」登録推進講演会を開催し、講師としてボルナーさんとヨハネス・バート氏の子孫マイケル・コーバーさんにお越しいただきました。その講演会でボルナーさんから寄贈いただいた資料150点については、調査が終わり次第お伝えします。（長谷川）

ドイツ兵捕虜の子孫による寄贈

「第九」アジア初演 100 周年に際し、多くのドイツ兵捕虜の子孫や関係者がドイツ館を訪れました。今回、ボルナーさんからの寄贈を主に取り上げましたが、その他にカールステン・ヘルマン・ズーア氏の子孫マリオン・ズーア＝モイリッヒさんからは板東美術工芸展覧会の賞状を寄贈いただきました。ヴィルヘルム・ジームセン氏の子孫ジームス・ジームセンさんからは、当時の写真データをご提供いただきました。また、慰霊碑の制作に携わったゲオルク・プフリューガー・シニア氏の子孫シュテファン・プフリューガーさんからは、オランダからチューリップの球根千個を鳴門市に寄贈いただきました。この場をお借りし心より感謝申し上げますとともに、貴重な資料を末長く保存管理、活用し、資料のもつ様々なメッセージを伝えていきたいと思います。



6月2日 ドイツ館を訪れた子孫と関係者

ドイツ館で開催された主な行事

3月29日(木)～4月29日(日)

「第九永遠なり」講演会連動企画展

4月7日(土)

記念講演会「第九永遠なりー板東俘虜収容所の記憶を
たどってー」

(講師:徳島新聞社 藤長英之氏)

5月29日(火)～7月29日(日)

「第九」アジア初演 100 周年企画展

6月1日(金)

松江豊壽銅像建立除幕式

よみがえる「第九」演奏会 ドイツ館前広場にて

6月2日(土)

ドイツ兵捕虜の子孫来館

7月16日(月)

「第九」アジア初演 100 周年記念企画展関連講座

(講師:学芸員 長谷川 純子)

8月28日(火)

第3回「板東俘虜収容所」関係資料保存管理検討会

10月15日(月)～12月27日(木)

「板東に生きた祖父を想う」特別展

10月27日(土)

ユネスコ「世界の記憶」登録推進講演会

「板東に生きた祖父を想う」

(講師:ペトラ・ボルナー氏 マイケル・コーバー氏)

10月28日(日)

ドイチェス・フェスト in なると



6月1日 よみがえる「第九」演奏会 ドイツ館上空から

✧ 今後の予定 ✧

2019 年

1月11日(金)～2月24日(日)

ドイツ館企画展示室

企画展「板東収容所捕虜の文化活動」

主催:ドイツ館史料研究会

1月12日(土)～20日(日) 10:00～19:30

○東京

Bunkamura Box Gallery

ユネスコ「世界の記憶」登録推進特別展

「板東俘虜収容所」の世界観

100 年前の収容所に花開いたドイツ文化と日独交流の
歴史

3月26日(火)～31日(日) 10:00～19:30

○京都

京都文化博物館 別館ホール

ユネスコ「世界の記憶」登録推進特別展

「板東俘虜収容所」の世界観

収容所生活を送るドイツ兵たちと見守る人びとの
良き思い出の記憶

3月30日(土) 13:00～ 記念演奏会

一所内演奏会「第7回室内楽の夕べ」(1919年3月26
日)再現コンサートー

主催:徳島県教育委員会 鳴門市